

＜講演抄録＞3. 成長期に小臼歯抜歯治療を受けた患者の成人期顔面プロファイルについて(第26回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)：非抜歯治療例および未治療正常咬合者との比較

著者	白土 祥樹, 山内 積, 佐藤 亨至, 三谷 英夫
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	14
号	1
ページ	83-83
発行年	1995-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31501

3. 成長期に小臼歯抜歯治療を受けた患者の成人期 顔面プロファイルについて——非抜歯治療例 および未治療正常咬合者との比較——

白土祥樹, 山内 積, 佐藤亨至, 三谷英夫(歯科矯正)

矯正治療では, 重度の discrepancy の解消や側貌の改善を目的として, 小臼歯抜歯による矯正治療が行われる場合がある。本研究では, 成長期に小臼歯抜歯による治療を受けた女子を対象として, 抜歯治療の顎骨成長への影響の有無や成長終了後の顔面プロファイルの特徴について, 非抜歯による治療を受けた女子や未治療の現代日本人正常咬合者と比較検討した。

資料は, 顎整形力を適応しなかった症例のうち, 成長期に上下左右第一小臼歯 4 本の抜歯を行いフルブラケット装置による治療を受けた女子 23 名(抜歯治療群)の初診時(平均 8 歳 4 ヶ月)と成長終了後(平均 19 歳 6 ヶ月), 非抜歯によって治療を受けた女子 16 名(非抜歯治療群)の初診時(平均 8 歳 3 ヶ月)と成長終了後(平均 18 歳 5 ヶ月), および未治療の現代日本人女子正常咬合者 27 名(平均 19 歳 5 ヶ月)の側面頭部 X 線規格写真である。これより軟組織を含めた平均顔面ダイヤグラムの作成, 線・角度計測および成長量を求めて比較検討を行った。

その結果, 抜歯治療群の顎骨成長量については, 非抜歯治療群との間には明らかな差は認められなかった。また, 成長終了後においては, 抜歯治療群は非抜歯治療群に比べて上・下顎前歯が後退し, 軟組織においても口唇部が後退したプロファイルを示す傾向にあり, 現代日本人正常咬合者とほぼ一致した顔面プロファイルが獲得されていた。

4. 矯正治療による咬合再構成と下顎枝垂直骨切り術(IVRO)によって対応した顎関節内障の一例について

代元巳弥, 菅原準二, 藤井智巳, 三谷英夫(歯科矯正), 後藤 哲, 長坂 浩, 川村 仁, 茂木克俊(口腔外科 1)

近年急増している顎関節症の患者に対する治療法としては, スプリント療法, 咬合調整, 補綴物による咬合再構成, 外科的治療, 関節鏡視下手術など様々な方法が行われているが, いずれの方法も, その適応症, 治療効果に関して, 未だ明確にされてない点が多く, 治療法の選択はまだ未解決な問題というのが現状である。我々は, 関節窩内における下顎頭, 関節円板の位置が不調和をきたしている顎関節内障の患者に対して

は, 顎関節に過度な負荷を与え続ける不調和な咬合と顎関節部との関係を一旦離断し, 近位骨片に付着する軟組織や閉口筋の生理的作用により下顎頭を良好な位置へ誘導させ, 顎関節内の安静化を図ることを目的とする, 下顎枝垂直骨切り術(I.V.R.O.)を適用した顎矯正外科治療を, 選択肢の一つと考えている。今回, このような概念に基づいて治療した一症例について報告し, MRI 検査, 関節腔造影検査, アキシオグラフによる下顎運動記録等の客観的評価をふまえて, 本法の有効性について検討する。患者は顎関節症と叢生を主訴とする 25 歳の女性で, 上下顎に負の arch length discrepancy を有する下顎後退型の Skeletal Class II を示し, 左右顎関節部の reciprocal click, 右側顎関節部圧痛を伴っていた。智歯と上顎第一小臼歯の抜歯, マルチブラケットシステムによる術前矯正治療を行った後, I.V.R.O. を施行した。現在, 手術後 1 年 8 ヶ月を経過しているが, 顎関節症状は消退し, 経過は順調である。

5. 当科における顎関節症患者の臨床統計的検討

斎藤政二(公立志津川総合病院歯科口腔外科), 永井宏和(口腔外科 2), 高橋 哲(秋田大学医学部歯科口腔外科)

今回我々は, 公立志津川総合病院歯科口腔外科における顎関節症患者について臨床統計的検討を行い, その概要を報告した。対象症例は 1992 年 2 月から 1994 年 9 月までの 2 年 7 ヶ月の間に当科を来院し, 顎関節症と診断され治療を行った 59 例で, 男性 13 例, 女性 46 例, 男女比は 1:3.5 であった。年齢分布では 20 代が最も多く 15 例, ついで 10 代 14 例, 30 代 9 例であった。主訴は関節部疼痛, 咀嚼筋部疼痛がともに 15 例で最も多く, つづいて開口障害 14 例であった。病歴期間は 1 ヶ月未満のものと 1 年以上のものがともに 21 例と多かった。来院経路は直接来院 42 例, 紹介 17 例で診療科別紹介内訳では歯科が 10 例と最も多かった。症型別頻度では 1 型 3 例, 2 型 6 例, 3 型クリック群 31 例(間欠的ロックを含む), 3 型ロック群 9 例, 4 型 10 例で 3 型と 4 型をあわせた顎関節内障は全体の 85% であった。当科での顎関節内障に対する治療は, スプリント療法や義歯挙上による治療あるいはマニピュレーションなどによる保存治療から開始するが, 無効であった場合外科治療を併用した。つまりパンピングを施行し, さらに奏効しない場合は関節鏡視下手術を行った。また二次治療を必要とする患者には, 補綴治